

## 第3節 越中瀬戸焼搗鉢についての一考察

### 1 はじめに

搗鉢とは『粉などをすりひく容器。摺盆、すりこ、山芋ばちなどともいわれる。』[齋藤2001]や『摺粉鉢・搗盆・カガツとも。山芋・味噌・胡麻などを摺卸するための鉢。漏斗状で、内側に縦に刻み目がついており、摺粉木を用いて摺る。』[下中2001]とされており、概ね食物を摺り卸すための調理具として使用するのが一般的である。

本遺跡からは形態的に17世紀初頭に位置づけられる越中瀬戸焼搗鉢片が3点出土している。本稿では、16世紀末～17世紀初頭に操業していたと考えられる越中瀬戸大窯の黒川窯・小森窯・山下窯の3基から採集された搗鉢を用い、これら3基における口縁形態の対比結果を踏まえた上で、本遺跡出土搗鉢と大窯における搗鉢との口縁形態を比較・検討することにより、本遺跡出土の搗鉢がどの窯に比類するか若干の考察を試みる。

なお、黒川窯に関しては今回の考察にあたり上市町教育委員会より借用した初出の資料24点(口縁部片19点・体底部片5点)についても追加記載する。

### 2 越中瀬戸焼の概要(研究史)

越中瀬戸焼は富山県上市町・立山町周辺で焼かれた瀬戸美濃焼系の焼き物で、江戸時代には「瀬戸焼」と呼ばれていた。明治28年刊行の『加賀越中陶磁考草』で「越中瀬戸焼」の名称を初めて使用されている。現在では愛知県瀬戸地方の瀬戸焼と区別するため「越中瀬戸焼」と呼称されている。

研究史は宮田進一氏[宮田1988・1997・1998]、安田良榮氏[安田1988]、定塚武敏氏[定塚1974]らにより考古学と文献史学の両方から詳細にまとめられている。

越中瀬戸窯の考古学的調査は、昭和4年に初めて行なわれており、窯の名称・種類・所在地・操業時期・現状などの調査が行われた。昭和15年には地元の日本海電気が東京帝室博物館の鷹巢豊治氏・田中耕太郎氏を招いて大窯と登窯の発掘調査を行った。昭和53年には富山県埋蔵文化財センターが上瀬戸・下瀬戸・新瀬戸窯で試掘調査を行っている。近年では立山町教育委員会が1999年に新瀬戸窯の試掘調査を、2000年に発掘調査を行っている。

越中瀬戸焼の編年研究については、宮田氏の黒川窯・小森窯・山下窯・彦衛門窯の表採資料による編年[宮田1988]や、瀬戸美濃大窯編年との比較から越中瀬戸焼の時期区分を行った藤澤良祐氏の研究[藤澤1993・1997]が挙げられる。

越中瀬戸焼の操業開始時期について出土事例からの検討もされており、石川県中能登町石動山遺跡の天正10年(1582)焼失一括遺物[馬場1990]および富山県上市町弓庄城の天正10年落城以前の溝SD1002から越中瀬戸焼が出土している点から、越中瀬戸焼の上限が1582年以前に遡及するという見解がある[上市町教育委員会1985]。

一方、文献史上での操業開始時期については、天正19年(1591)と文禄2年(1593)の説が考えられている。特に天正年間に加賀藩前田家の老臣前田安勝によって招かれた陶工小二郎の開窯をもって、越中瀬戸焼の生産が開始されたとする説が有力とされている[定塚1974]。

### 3 越中瀬戸大窯について〔宮田1988、藤澤1993・1997〕

ここで、比較対照資料の生産地である黒川窯・小森窯・山下窯の大窯3基の概要について述べる。

#### 【黒川窯】

富山県上市町黒川地内に所在する大窯である。上市川支流の郷川右岸の丘陵の頂上付近、南向きの斜面に立地する。本窯跡の発掘調査は行なわれておらず、詳細な窯体構造については不明だが、10×10mの範囲に遺物が散布している状況が確認されている。採集遺物には、天目茶碗・丸碗・丸皿・播鉢・茶入れ・茶壺・水指・徳利・瓶などがある。

操業時期については瀬戸美濃大窯編年との比較から、第3段階後半(1575～1590)～第4段階前半(1590～1610)に比定されているが、閉窯時期は不明である。現状では黒川窯が越中瀬戸焼初期の窯であると位置付けられている。

#### 【小森窯】

富山県滑川市小森地内に所在する大窯である。郷川の右岸の丘陵上に位置し、黒川窯の北西600mに立地する。本窯跡も発掘調査は行なわれておらず、詳細な窯体については不明だが痩せ尾根頂上付近の斜面に若干の凹みが見られ、その下方に約10×20mの範囲で遺物が散布している。採集遺物には、天目茶碗・丸碗・丸皿・折縁皿・中皿・大皿・播鉢・茶入れ・広口壺・徳利・土瓶・水指などがある。

操業時期については瀬戸美濃大窯編年との比較から第4段階(1590～1610)に比定され、黒川窯から若干遅れて操業が開始されており、17世紀初頭まで操業される。

#### 【山下窯】

富山県立山町上末地内に所在する大窯である。白岩川上流、南北に延びる丘陵上の西側斜面に立地する。昭和15年に発掘調査が行われており、その際に窯の床面を確認したと報告されているが、現在ではその位置は明確に把握されていない。現況では、遺物は斜面の平坦面と下方の斜面にそれぞれ約10×10mの範囲で散布している。出土遺物および現在までの採集遺物には、天目茶碗・丸碗・小坏・丸皿・折縁皿・播鉢・大皿・向付・水指などがある。

操業時期については瀬戸美濃大窯編年との比較から第4段階(1590～1610)に比定され、小森窯から若干遅れるかもしくはほぼ同時期に操業が開始され、小森窯同様17世紀初頭まで操業される。

このように、越中瀬戸大窯については黒川窯が初期の窯で他の2基より先行すると考えられる。また小森・山下窯については山下窯が小森窯より若干遅れるか、もしくはほぼ同時期に開窯し両窯とも17世紀初頭まで操業すると考えられている。

### 4 形態分類

越中瀬戸焼播鉢の形態分類は、宮田氏〔宮田1988・1997〕、藤澤氏〔藤澤1993〕らにより行われている。従来の分類案は口縁部の作り方をもとに分類したもので、宮田氏は「縁帯を作るもの(A類)」と「口縁部を折り返すもの(B類)」の2類型に大別し、A類を1～4類、B類を1・2類に細分し、全16系統にしている。藤澤氏も概ね宮田氏と同様の分類案を提示している。

本稿では従来の分類に則しつつも、口縁部の縁帯の傾きに着目した新たな分類を行った。ここでは、縁帯の傾きによってⅠ～Ⅲ類に大別した後、縁帯面の形態的特徴からA～C類に分類した。さらに、口縁端部および縁帯下部の特徴から、a～g類に細分した。

【縁帯の傾き】

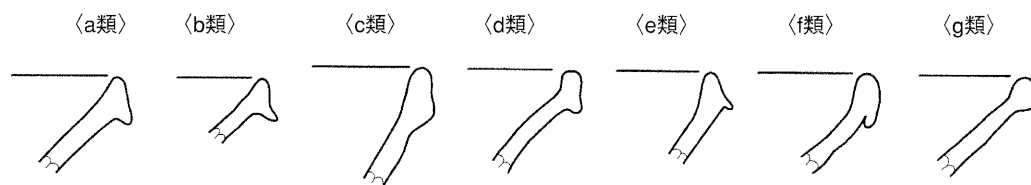
- I 類：縁帯が体部に対して外傾するもの。
- II 類：縁帯が体部に対して内傾するもの。
- III 類：縁帯が上面を向いて水平なもの。

【縁帯面の特徴】

- A 類：縁帯面にくぼみをもつもの。
- B 類：縁帯面が平坦なもの。
- C 類：縁帯面に丸みをもつもの。

【口縁端部および縁帯下部の特徴】

- a 類：口縁端部は延び上がらず、縁帯下部が垂下するもの。
- b 類：口縁端部は延び上がらず、縁帯下部が垂下し、かつ水平方向に挽き出すもの。
- c 類：口縁端部が延び上がり、縁帯下部は垂下しないもの。
- d 類：口縁端部と縁帯下部が延びるもの。
- e 類：口縁端部と縁帯下部が延び、かつ縁帯下部を水平方向に挽き出すもの。
- f 類：口縁端部と縁帯下部が延び、かつ縁帯下部が垂下し体部に引付くもの。
- g 類：口縁端部と縁帯下部がほとんど延びないもの。



第53図 越中瀬戸焼播鉢 形態分類図

## 5 富山城跡出土資料及び大窯資料の様相

【富山城跡】 本遺跡出土資料はSE09から出土した1点と包含層から出土した2点の計3点である。

1(2)はSE09から出土した播鉢片で、縁帯が上面を向き水平であり、縁帯面はくぼみをもち、縁帯下部が垂下する形態からIII Aa類である。

2(53)と3(30)は包含層から出土した播鉢片で、2は縁帯が上面を向き水平であり、縁帯面はくぼみをもつ。口縁端部は先細りをするが口縁端部と縁帯下部が延びる形態からIII Ad類である。3は縁帯が上面を向き水平であり、縁帯面はくぼみをもち、口縁端部と縁帯下部がほとんど延びない形態からIII Ag類である。

次に越中瀬戸大窯資料の様相を概観する。なお、大窯資料については宮田氏〔宮田1988〕と藤澤氏〔藤澤1993〕の報告資料を参照し、黒川窯の資料においては初出の表採資料(口縁部片19点)を用いることとする(第54・55図)。

【黒川窯】 黒川窯から採集された資料は、縁帯の傾きではI類が最も多く、次いでII類が多い。また、縁帯面の形状はB類が最も多くを占め、次にA類が多く、今回の表採資料ではC類はごく少量である。口縁端部および縁帯下部の特徴はf類とg類を除いた形態が認められる。特にa類とe類が多く、半数以上を占める。黒川窯での主体はI Ba類とI Ae類である。

【小森窯】 小森窯から採集された資料で図面を確認できたものについては、縁帯の傾きはⅠ類のみである。縁帯面の形状はⅢ類が最も多く、次にⅠ類、Ⅱ類である。黒川窯資料ではごく少量であったⅢ類が小森窯では増加する傾向を示す。口縁端部および縁帯下部の特徴では黒川窯で認められなかったⅢ類とⅣ類が認められ、多種多様な口縁形態を呈する。小森窯ではⅠⅠ類・ⅠⅡ類を基本にⅢ、Ⅳ、Ⅴ類を特徴にもつ口縁形態が主流となる。

今回は図面を確認できなかったが、Ⅱ類に該当する「口縁部を折り返すもの」が報告されていることから、本来はⅡ類も存在していたと考えられ、今後の資料次第で本窯の結果が変わる可能性があることを留意しておく。

【山下窯】 山下窯から採集および発掘された資料は、縁帯の傾きではⅠ類が最も多く、次いでⅢ類である。縁帯面の形状はⅠ類が最も多く、次にⅡ類、Ⅲ類と続く。口縁端部および縁帯下部の特徴では、Ⅲ類を除いた全ての形態が認められるが、特に他の大窯では少量であったⅢ類が最も多く、増加する傾向を示す。山下窯での主流はⅠⅠⅠ類、ⅠⅠⅡ類、ⅠⅡⅢ類である。ただし、本窯では他の大窯2基では認められなかったⅢ類が初めて認められたことを特記する。

越中瀬戸大窯3基の操業時期は調査成果から、黒川窯が越中瀬戸焼初期の窯で他の2基より先行すると考えられており、小森・山下窯は同時期もしくは山下窯が若干遅れて開窯し、17世紀初頭まで操業すると考えられている。このような前提で大窯3基の播鉢を口縁形態により比較すると、縁帯の傾きではⅠ類が3基全てで認められることから、Ⅰ類が主流形態であるといえる。また、Ⅱ類は山下窯で認められていないことから、山下窯以前の形態であるといえる。Ⅲ類に関しては、現状では山下窯のみの口縁形態であると考えられる。縁帯面では3基ともにⅠ～Ⅲ類が認められるが、黒川窯ではⅡ類が最も多いのに対し、小森・山下窯では、Ⅰ類、Ⅲ類が多く、縁帯面は徐々に丸みをもつ傾向となることが窺える。口縁端部および縁帯下部の特徴については、黒川窯がⅢ類、もしくはⅣ類が主体であるのに対し、小森窯では黒川窯で認められた形態に加え、新たにⅤ類やⅥ類など多種多様な形態が認められる。また、山下窯においても全ての形態が認められるが、特に他の大窯では少量であったⅢ類が最も多く、Ⅲ類が増加する傾向を示す。

このように、大窯3基では共通の形態(縁帯が外傾するもの・縁帯下部が垂下するもの)を持ちながらも、縁帯の傾きがⅡ類(内傾するもの)からⅢ類(水平になるもの)へ移行するのが読み取れる。また縁帯面は、黒川窯ではⅡ類(平坦であるもの)が主流であるのに対し、小森・山下窯ではⅠ類(くぼみを持つもの)、Ⅲ類(丸みを持つもの)の占める割合が増加することから、縁帯面がⅡ類からⅠ・Ⅲ類に移行するものと考えられる。口縁端部および縁帯下部の特徴についても3基ともⅢ類(縁帯下部が垂下するもの)が基本であるが、小森窯・山下窯ではⅤ類(縁帯下部が体部に引付くもの)やⅣ類(縁帯下部が垂下しないで上方に延びあがるもの)が出現し、時期とともに徐々に縁帯下部が体部に引付く傾向が強くなることが窺える。

縁帯の傾きについて、Ⅱ類(内傾するもの)からⅢ類(水平なもの)へ移行する傾向を指摘したが、Ⅲ類(平行なもの)は18世紀初頭の新瀬戸窯においても認められることから、17世紀初頭の山下窯を初現とし、18世紀初頭まで継続する形態と考えられる。また、現状では山下窯のみで認められるⅠⅢ類(縁帯の傾きが外傾し、口縁端部が延び上がり縁帯下部が垂下しないもの)が17世紀中ごろの彦右衛門窯や18世紀初頭の新瀬戸窯において定量存在する[立山町教育委員会2001]。このことから、播鉢については17世紀初頭の山下窯を契機に口縁形態が変化し、それ以降18世紀初頭までの播鉢は山下窯の系譜を引くものである可能性が高いと考えられる。

## 5 胎土分析 富山城：（第54図 - 1・2）、黒川窯：（第54図 - 25・26）

今回、上市町教育委員会のご好意により借用させていただいた黒川窯表採資料と本遺跡出土資料とを、胎土蛍光X線分析を用いて比較する。分析結果は概要のみ記すとし、詳細な報告は第V章の参照を願いたい。

蛍光X線分析結果によると、4点とも主要元素( $\text{SiO}_2$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ )の数値のうち、 $\text{SiO}_2$ はほぼ同値であるのに対し、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ は本遺跡出土の2点はほぼ同値だが、黒川窯の2点についてはバラつきがあり、本遺跡出土のものは黒川窯のものと数値で若干の差が生じている。また、主要元素 $\text{CaO}$ 、 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ および微量元素 $\text{Sr}$ 、 $\text{Y}$ 、 $\text{Ba}$ などは明らか本遺跡出土の資料よりも黒川窯表採資料のほうが含有量は多く、黒川窯産は主要元素結果から本遺跡出土のものに比べ長石類を多く含んでいることが示された。

以上の結果から、本遺跡出土の播鉢の胎土と黒川窯表採の播鉢の胎土は、異なるものであり、本遺跡のものについては別の窯で生産された可能性が極めて高いといえる。

今回の黒川窯産播鉢の胎土分析結果については越中瀬戸焼の定点資料の1つとして位置づけられ、今後は他の窯においても比較対照資料として胎土分析を行っていく必要があると考えられる。

## 6 まとめ

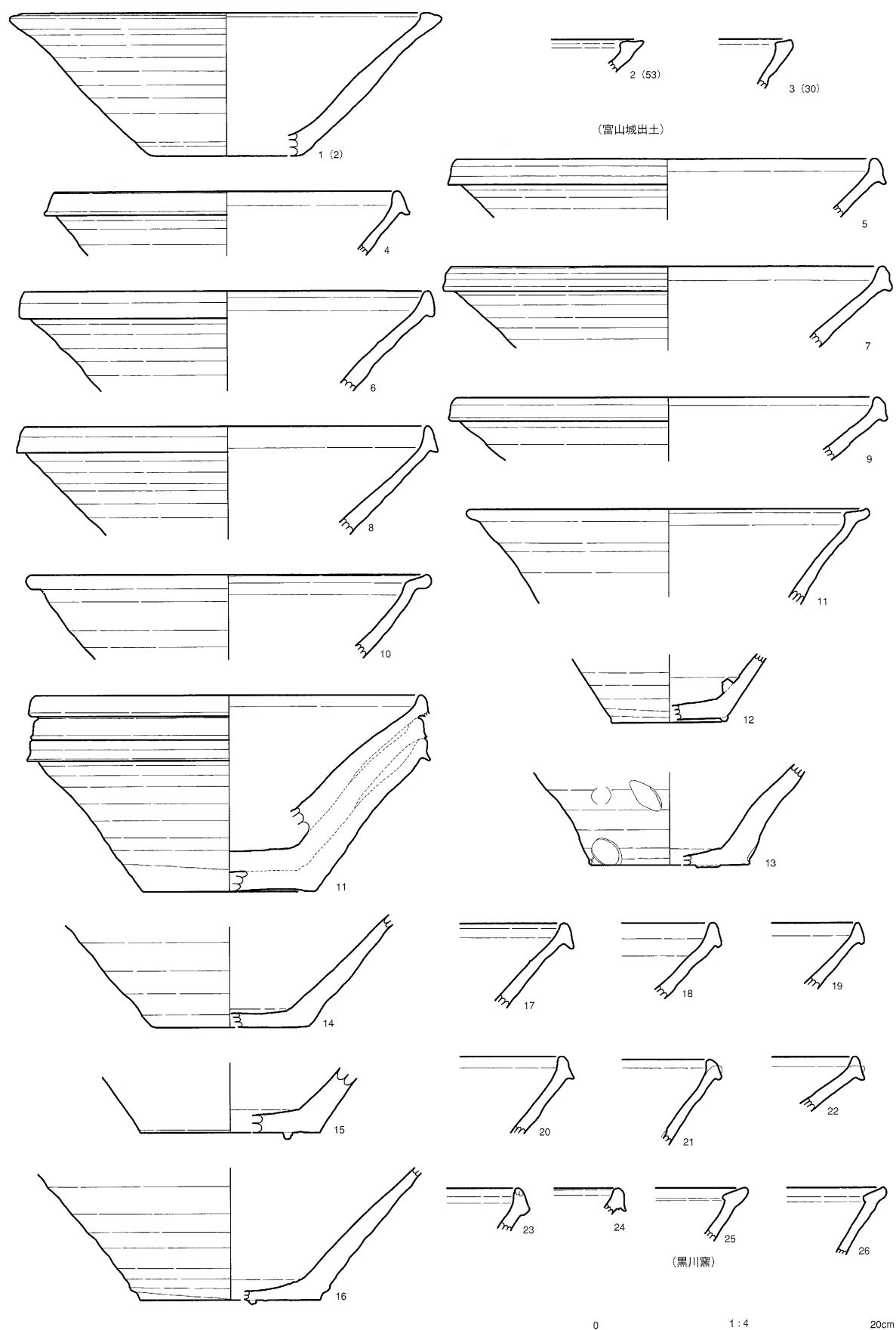
これまでの結果を踏まえ、本遺跡出土資料と大窯資料を比較した結果、以下の3点が指摘できる。①本遺跡出土資料3点は全てⅢ類(縁帯が水平なもの)に属するものであり、この形態は現状では山下窯でのみ認められる。②本遺跡出土資料には、黒川窯ではみられないg類が含まれている。③化学分析の結果から、本遺跡出土資料は黒川窯産である可能性は極めて低いことが証明された。

上記②・③より、本遺跡出土資料については黒川窯である可能性は低く、小森・山下窯産であると考えられる。また、①より本遺跡出土資料は山下窯産である可能性が高いと考えられる。

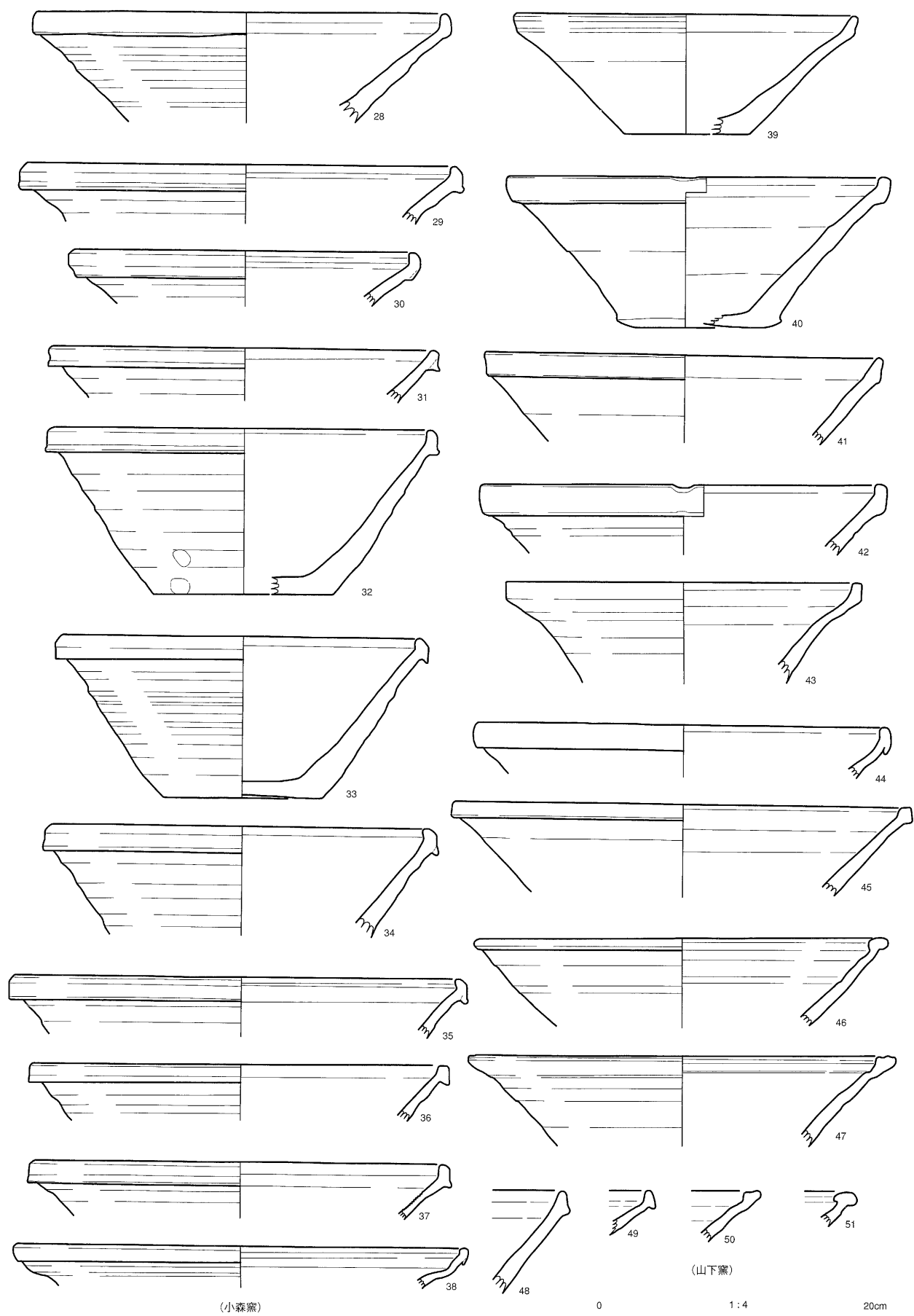
本稿では、越中瀬戸焼播鉢の縁帯の傾きに着目した新たな形態分類案を提示した。今回は宮田・藤澤両氏の報告資料を中心に扱い実見した資料が少なかったため、今後資料を実見した上で今回の分類案の妥当性を検証する必要がある。また、17世紀初頭～19世紀の廃絶時期までの播鉢についても検討し、より長期間の変遷過程を明確にする必要がある。越中瀬戸焼資料の増加を待ち、更なる研究の深化を図りたい。

最後になりましたが、今回の考察を行うにあたり、貴重な黒川窯資料を提供してくださいました上市町教育委員会に感謝致します。

(村上)



第54図 越中瀬戸焼 擂鉢実測図1 (富山城跡：1～3 ( ) 内は第Ⅲ章掲載番号、黒川窯：4～26)



第55図 越中瀬戸焼 播鉢実測図 2 (小森窯：28～38、山下窯：39～51)